

# 1. 文学部・文学研究科

I	文学部・文学研究科の研究目的と特徴	1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	1 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	1 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	1 - 5
III	質の向上度の判断	1 - 7

## I 文学部・文学研究科の研究目的と特徴

### 1. 目的

大阪大学文学研究科・文学部は、近世大坂の「懐徳堂」を自らの精神的源流と位置づけ、それを礎に、旧弊にとらわれない、常に時代の動きに即した清新かつ独創的な研究を展開し、その成果を人類社会の文化的向上に資すべく地域と世界に発信することを目指し、以下のような目的を設定する。

(1) 基本的な研究理念：人文学を構成する諸領域の学術的意味と可能性を批判的に検証し、その新たな方向性を探求する。(2) 重点課題の推進：文化の生成を複数文化間のインターフェイス（接触）という新しい視点から把握し、新たな学問領域を切り開くために、重点課題を設定して取り組む。(3) 基礎的研究と領域・分野横断的研究の両立：専門分野の研究伝統を維持・発展させるとともに、学内外の研究動向や社会的ニーズに応じた領域・分野横断的な学際的・国際的共同研究をバランス良く推進する。(4) 人材育成教育との連携：研究者や高度専門職業人を養成するための教育を重視し、それと密着した形で研究を展開する。(5) 国内外への発信と社会への還元：専門性の高い研究成果を国内外に発信するとともに、その成果を広く社会に還元して、市民社会の文化環境の持続的向上や発展に寄与するよう努める。

### 2. 特徴

(1) 沿革：本研究科は、昭和23年の文学部設置にあわせて設立されたが、昭和28年には8専攻からなる新制大学院の研究科としてあらためて出発した。その後専攻の新設や学部分割による移行などがあったが、昭和50年に全体を博士課程とし、従来の修士課程・博士課程を博士前期・後期課程とする改革が行われた。このとき日本学専攻が、また昭和52年には芸術学専攻が新設されて8専攻となり、本研究科の特徴ある構成が生まれた。平成6年の教養部の廃止にともない、文学部・文学研究科は17名の教員を迎え入れ、あわせて小講座制を廃して大講座制へ移行した。

(2) 現在の組織編成：文学部創立50周年にあたる平成10年には大学院機構改革（大学院重点化）がスタートし、まず、哲学、日本学、日本史、世界史、考古学、人文地理学の6講座が文化形態論専攻に、ついで平成11年に国文学・東洋文学、西洋文学・語学、日本語学、芸術学、芸術史の5講座が文化表現論専攻に編成された。この大学院重点化の改編に際して、2専攻のそれぞれに大学院専担として広域文化形態論講座・広域文化表現論講座が新設されたことは特筆すべきことである。こうして、文学研究科の研究・教育組織は2専攻13講座23専門分野に編成されたのである。

広域2講座の新設は、教員・大学院学生がともに専門分野のもつ閉鎖性を克服しつつ相互に連携して幅広い研究活動を展開することを可能とし、21世紀COEプログラムの実現や、多様な留学生を積極的に受け入れるための基盤整備ともなった。また、平成19年に大阪外国語大学との統合により、修士課程の新専攻（文化動態論）が設置され、12名の教員を迎え入れることにより研究分野がますます多彩になり充実することになった。

### 3. 想定する関係者とその期待

本研究科は、まず国内外の人文学の諸学界から、その研究活動によって各学界をリードする存在として大きな期待を寄せられている。具体的には高水準の研究計画の提案や優れた研究成果の公表が求められる。

また国際学界からは学問的交流の拠点としての役割も求められている。具体的には外国からの研究員、教員の受け入れ、国際的な研究集会やセミナーの主催、また海外での教員による講演などが期待されている。他方で地域社会からは、地方公共団体との提携による展覧会、地元での文化財調査、委託調査など、研究成果の還元が期待されている。

出版業界、文化事業や文化産業の業界においても本研究科への期待は大きい。具体的には一般読者向けに影響力の大きい書物を執筆すること、公開講座、絵画、音楽などの催しに関与、協力することである。さらに、教育への積極的発言、働きかけも求められている。

## II 分析項目ごとの水準の判断

## 分析項目 I 研究活動の状況

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

文学研究科では研究科独自の調査によって、教員の研究業績の把握・公表に努めている。

以下、『年報』など本研究科の独自データを活用し、分野固有の基礎的研究、領域横断的な共同研究、人材育成と研究との密接な連携、研究の社会への還元、研究成果の発信の5点から、研究活動の実施状況を分析する。

個々の学術領域における活発な研究活動は、研究業績に示されている。論文の殆どは招待論文(387本)、査読論文(95本)である。また、著書では、共著・編著も多いが、単著も毎年17、18本に上っている。国内の学会発表や海外の講演・講義も数多い(【資料1】)。

## 【資料1】研究業績調査結果(2004年度4月から2007年度10月1日までの3年6カ月間)

全学統一データの分類項目	論文			著書		
	論文			著書		
『年報』における分類項目	論文			著書		
年度	総論文数	うち査読論文内数	うち招待論文内数	翻訳・書評・解説・辞典項目等	総著書数	うち単著
					平成16年度	174
平成17年度	165	34	105	176	64	18
平成18年度	186	21	138	87	82	18
平成19年度	46	8	37	40	13	2
計	571	95	387	474	229	55

  

学会発表数	
平成16年度	78
平成17年度	84
平成18年度	80
平成19年度	46

『大阪大学大学院文学研究科 年報』データおよび、教員に対するアンケートにもとづき作成。全学統一データ(データ番号1-1-39 論文・著書等の研究業績や学会での研究発表状況)とのずれは、主として『年報』データの回収率が全学統一データの回収率を上回るなど母数が異なることによる。また本データには統合による本研究科への配置換教員に対するアンケート結果も含んでいる。

競争的外部資金の獲得状況や科研費の新規採択率は高水準で推移している（【資料2】【資料3】）。

**【資料2】競争的外部資金（教育イニシアティブ、文部科学省科学研究費補助金および21世紀COEを除く）**

平成16年度	18,241,000円
平成17年度	28,651,900円
平成18年度	35,102,290円

（「平成18年度全学基礎データ」より作成。大阪外国語大学との統合に伴って配置換えされた教員の獲得資金を反映しない。以下同。）

**【資料3】科学研究費の採択率**

平成17年度	51%
平成18年度	42%
平成19年度	60.5%

（研究推進室資料）

また各専門分野は、学会事務局の設置、学会や研究会の開催、研究員の受け入れを通して、学術活動の拠点としての責務を積極的に果たしている（【資料4】）。

**【資料4】研究員の受け入れ状況**

	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度	
	前期0	後期14	前期20	後期20	前期17	後期23	前期6	後期0
特任研究員								
招聘研究員（日本人）	1		5		2		9	
外国人招聘研究員	20		18		19		16	
JSPS（DC1）	1		3		4		5	
JSPS（DC2）	7		5		5		3	
JSPS（PD）	5		5		5		4	
JSPS（SPD）	0		0		1		1	

（庶務係資料）

文学研究科を中心とする21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」では、大阪大学の人文科学研究の伝統を発展させ「横断と臨床」を核に人文科学の構造変換を行うモデルを策定して、世界的研究拠点を築くと同時に若手研究者を養成した。加えて国際共同研究も活発に実施され、毎年10件を超える数が報告されている（平成18年度は17件）。

また、共同研究に特化して設立された広域2講座では、文化基礎学・地域社会論・言語文芸学にわたって部内外の研究者の交流と連携による研究成果を発表して、関西における共同研究拠点となった。

翻訳・書評・辞典等の著作活動は、社会における人文科学的知の共有を促進し、学際的な研究活動を推進するための基盤である。また、大阪大学歴史教育研究会では、高度専門職業人養成の一環として高校における歴史教育との対話が続けられ全国的な注目を浴びている。

研究成果の社会還元としては、第一に文化財調査、委託調査等を積極的に受け入れている（【資料5】）。

**【資料5】国・自治体からの受託調査の受入状況**

年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
件数	34	38	29

（「平成18年度全学基礎データ」より作成）

第二に、本研究科は懐徳堂記念会との協力のもと公開講座を通じて研究成果の還元を行っている。また、文学研究科教員は朝日カルチャーセンターとの共同事業「Handai-Asahi 中之島塾」において生涯学習支援を行っている。懐徳堂センターでは、懐徳堂関係の情報を電子化して公開している。さらに臨床哲学専門分野では、対話技法研究に基づき学外団体と連携して市民の哲学的対話をサポートしている。

第三に市民社会の文化向上に寄与するための研究活動として、出版社と連携したシリーズものの企画や、高校教科書や大学・社会人教育のための教科書の執筆がある（【資料6】）。

#### 【資料6】企業との連携状況

年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
件数	9	13	16

（「平成18年度全学基礎データ」より作成）

本研究科の構成員の研究活動は高く評価され、多くの賞を得ている（【資料7】）。本研究科や各専門分野が主体になって編集している刊行物も数多い。また、人文学の中核的研究拠点として、学会、研究会、国内的・国際的なシンポジウム、公開講演、ワークショップ、演奏会等、多様な形態で研究成果を発信している（【資料8】）。

#### 【資料7】受賞状況

年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
件数	4	5	6
件数	4	5	6

（大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科HPより作成）

#### 【資料8】講演会、学会、シンポジウム等の実施状況（平成18年度）

種別	講演会	講座	学会・シンポジウム等	セミナー・フォーラム等	研究会
件数	43	22	27	19	46
上記のうち国際集会	6	0	8	3	0

（「平成18年度全学基礎データ」より作成）

## （2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を大きく上回る。

（判断理由）

分野毎の基礎的研究における成果発表の数と質（受賞実績などに反映）、外部資金の獲得、拠点としてのさまざまな役割の達成において、全国の人文学系研究科の中できわめて優位にある。また共同研究においてもCOE、広域2講座が非常に大きな実績を挙げている。研究成果の社会還元も、懐徳堂記念会との連携講座などの市民向け講座、教科書・辞典執筆などで着実に果たしている。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

### （1）観点ごとの分析

<p><b>観点</b> 研究成果の状況（大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。）</p>
---

（観点に係る状況）

本研究科では、後掲の判断基準に従って厳密な検討を行い、卓越した研究を精選した。

まず学術的意義という面から哲学、日本学、史学、地理学関連の業績を挙げると、上野修のスピノザ研究（研究業績リスト No. 1001、以下同じ）は、その透徹した論理により3本以上の学術誌書評で高い評価を得ている。堂山英次郎のヴェーダ語研究（1003）のレベルの高さは二重の受賞から明らかである。平雅行は日本中世仏教に関する2本の論文（1020, 1021（仏訳を含む））で国内外の学界に強い影響を与えた。梅村喬も日本古代経済史についての蓄積を一書（1022）にまとめて、学界に大きな貢献をした。森安孝夫のウイグル・マニ教研究のレベルの高さは、その著書のドイツ語版刊行（1023）によって改めて示された。中国近世史では青木敦が注目すべき成果（1024）を公表している。イギリス帝国と環境史との関係に踏み込む水野祥子の著書（1026）は3本以上の書評で高く評価された。福永伸哉は三角縁神獣鏡についての自らの研究を総括した著書（1028）で権威ある賞を獲得した。都出比呂志の論文集（1029）も2点の書評で称賛された。地理学では堤研二の2本の論文（1031, 1032）がそれぞれ国際的な注目を浴びている。

文学・芸術学では、まず飯倉洋一が上田秋成について新しい視野を切り開き、4本以上の書評で称賛された（1007）。日本図書館協会選定図書にも選ばれた荒木浩の著書（1008）は学会の話題を集めたが、彼の古典の校注（1012）も評価が高い。加藤洋介の中古文学に関する綿密な考証論文（1011）も学界時評で評価された。後藤昭雄は一貫して平安期の漢文学にとりくみ、2冊の著書（1009（中文）, 1013）において国内外の学界で高い評価を受けた。国語学では金水敏がその著書（1017）で権威ある賞を受けている。森岡裕一のアメリカ文学に関する著書（1014）は、そのユニークな視点が3本の書評で評価された。英語学では大庭幸男が厳格な審査を経た高水準の論文（1018）を発表している。天野文雄はその大著（1010）で世阿弥時代の能の研究を一新したが、これには現時点で2本の書評が準備されている。永田靖は演劇と記憶という新しい問題に関する論文（1005）が権威ある雑誌に掲載された。市川明は論文（1015）でブレヒト研究に新風を吹き込んだと評された。

社会的・文化的意義という面からは、上野修がスピノザの宗教観念を平易に説いて多数の書評の対象となった（1002）。オウム真理教のリーダーの精神に肉薄することで現代宗教の深層に迫った川村邦光の著書（1004）は新聞雑誌で注目を集めた。とりわけ特筆すべきは桃木至朗の、高校・大学における世界史教育に関する積極的発言と行動である（1019）。森安孝夫の著作（1025）は、新しい世界史の見方を示すものとして新聞でも大きく取り上げられた。この点では藤川隆男の白人性に関する編著書（1027）も同様である。福永伸哉の考古学発掘調査成果の社会的活用に関するユニークな試み（1030）も新聞3社が取り上げ、自治体から感謝状も受けた。柏木隆雄、和田章男らは、フランス文学小事典（1016）の編纂を通じて人文学教育の基盤形成に貢献した。圀府寺司は、大きな関心を集めた2005年ゴッホ展で企画、カタログ執筆（1006）など中心的役割を担った。

## （2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を大きく上回る。

（判断理由）

S、SSの数はきわめて多い。その中では権威ある賞を受けたもの、また海外で高く評価されたものが多く含まれる。また社会的、文化的意義の高い成果が多いことは、研究成果の社会還元という本研究科の研究目標が十分に実現されていることを示している。これらの点で、学界と社会が人文系の研究科一般に対して抱く期待を大きく上回っていると言える。

### Ⅲ 質の向上度の判断

#### ①事例1「研究推進室の設置」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組)

法人化に伴い、平成16年度より従来の各種委員会を研究推進室、評価・広報室、教育支援室、国際連携室の4室に再編成した。そのうち、研究推進室は、科研・共同研究部門、図書管理部門、紀要・論叢部門からなる。科研・共同研究部門の任務として、科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供、申請書作成・計画実施の補助、教員・研究員の公募情報の収集・提供等がある。本室では、特に、科研費への応募にあたり若手教員・助教を対象にして講習会を行なうなどして、採択に着実な成果をあげている(1-4【資料3】)。

また、紀要・論叢部門では、冊子形態の文学部紀要をデジタル・アーカイブ化し、研究成果の情報発信を行っている。さらに、同部門では、教員が自らの研究成果を海外の学会誌に投稿し、また、国際学会の口頭発表に応募するために、外国語論文の校閲費を設けることで、研究成果の海外発信の援助を行なっている。

#### ②事例2「文化動態論専攻(修士課程)の設置」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組)

19年10月に大阪外国語大学との統合によって新しく文化動態論専攻(修士課程)が設置された。構成員は大阪外国語大学から配置換になった12名と既成専攻から配置換になった7名の教員からなる。この専攻は、古今東西の多様な文化事象を主として「動態」という側面から分析しようとする共生文明論、アート・メディア論、文学環境論、言語生態論の4コースによって組織される。「動態」というのは、社会の急激な変化によって、旧来の伝統的な人文学の体系の中では解明しきれないような文化的諸問題が多数生起していることに対応して構想されたものである。これにより、人文諸学への知見を有して分野横断的な発想に長け、高度の言語的能力と他者理解力を備えた、教育、放送、出版、文化事業、文化行政等に関わる高度専門職業人を養成することが可能になったとともに、研究領域の拡大発展も実現できることとなった。

#### ③事例3「高い研究水準の維持」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組)

人文学の諸領域の研究において、基礎的な学術研究から、COEプログラム「インターフェイスの人文学」などのような領域横断的な共同研究、国際的共同研究に至るまで、安定的・継続的に国内外の学界をリードする水準の研究活動を展開し、学問的営為の拠点としての機能を十分に果たしている。

#### ④事例4「各専門分野における達成目標と達成評価」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組)

各専門分野の教員は、年度初めに研究・教育に関する達成目標をたて、年度末にその目標の達成状況を自己評価している。そのような取組は、教員の研究・教育への意識をたかめ、質の高い多くの研究業績として実を結んでいる。また、教員のこのような研究意欲が学生の研究活動に大きな刺激を与えている(1-3【資料1】)。

#### ⑤事例5「サバティカル制度の導入」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組)

19年度にサバティカル制度を正式に導入し、各セメスターで2名の教員がその期間を利用して教育研究の自己研鑽をすることができるようにした。なお、サバティカル期間の授業に対しては、半年間で0.5セメスター分の非常勤講師の手当てがなされている。これによって、教育研究活動のリフレッシュ効果が期待される。